

第三章 光る源氏の物語 光る源氏の物語論

[第一段 玉鬘ら六条院の女性たち、物語に熱中]

長雨(ながあめ、梅雨が)例の年よりも(れいのとしよりも、例年よりも)いたくして(長く続いて)、晴る方なくつれづれなれば(晴れる日も無く手持ち無沙汰なので)、御方々(おんかたがた、六条院の御夫人方は)、絵物語などのすさびにて(絵を見たり書いたり物語を読んだり書き写したりを楽しみにして)、明かし暮らしたまふ(過ごしていらっしやいます)。

明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて(そうした方面のことにも素養があつて面白い絵本をお書きになって)、姫君の御方にたてまつりたまふ(姫君のところにお贈りなさいます)。

西の対には(対の姫にあつては)、*ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば(田舎暮らしで京の最新本は、増して珍しくお思いになる訳なので)、明け暮れ書き読みいとなみおはす(一日中写本に没頭し読み耽つていらっしやいます)。*つきなからぬ若人あまたあり(姫と一緒に物語の読み書きに興じた若女房も大勢居ました)。*「まして」は、注に<筑紫の田舎育ちゆえに絵や物語に対して一層の興味と関心をしめす。>とある。地方および下層に情報量が少なかったのは、インターネット以前の、ついこの前までの世の中の実情だ。*「付き無し」は<頼り無い、間に合わない>。それが「からぬ(未然+打消)」だから<頼り無いことの無い→役に立つ>。注には<『集成』は「(物語の蒐集、書写、挿絵かきなどに)うってつけの若い女房は大勢いる」と注す。>とある。また「若人」とあるのは、姫と一緒に物語三昧に<付き合った>という意味合いが有るのかも知れない。テレビ・ラジオのない時代に、芸人を呼ぶのもいいが、もっと気楽な親しい者との面白い会話は何よりの娯楽だったに違いない。

さまざまにめづらかなる人の上などを(様々に珍しい人の身の上などを)、真にや偽りにや(本当にせよ嘘にせよ)、言ひ集めたるなかにも(言い集めた多くの物語の中にあつても)、「わがありさまのやうなるはなかりけり(自分と同じような事情の話は無かつた)」と見たまふ(と姫はお思いになります)。

『*住吉』の姫君の、さしあたりけむ折はさるものにて(不遇の時は仕方が無いとしても)、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに(情勢が好転して、帝の御目に止まった時でさえ)、*主計頭が(殿上の高官とは言え従五位程度の会計責任者ふぜいが)、ほとほとしかりけむなどぞ(姫を娶り掛けるなどは)、かの*監(げん、大宰府現地指揮官)がゆゆしさを思しなずらへたまふ(の身の程知らずを対の姫は思い比べなさいます)。*「すみよし」は「住吉物語」のこと、とされる。が、Yahoo百科などによると、現存する「住吉物語」は鎌倉時代に整えられた継子虐めの物語で、この源氏物語で指しているその原型と思われるものの内容は定かではない、とのこと。それでも、宮腹の(ということは父親も参議以上であり入内も見込める血筋の)姫君が不運な目に遭いながら多くの事柄を経験するという設定自体は引き継いでいる、と考えられてはいるらしい。であれば、「さしあたりけむ折」は<差し当たって不運に遭った時>であり、「さるものにて」は<それはそれとして>という物語の概略なのだろう。そして「今の世の覚え」は、俄かに物語を離れて現実の<今の世間の評判>である筈は無く、物語上の<今上帝の御考え>と見るのが妥当だ。「心」に「御」が無いのも架空物語上

の一般論を示す、のだろう。で、その「なお」が場面転換によって事態が好転して「心殊なめる」もののくそれでもなお→その時でさえ>を意味する。*「主計頭」は「かぞへのかみ」と読み、大辞泉に<律令制で、主計寮(かずえりょう)の長官。>とある。「主計寮(かずへれう)」は<民部省に属し、国の税収・支出の会計をした役所>と古語辞典にある。調(献上調度類)と庸(労務人工)を計算し、租(献上米)を計算した主税寮(ちかられう)と役割分担した、とのこと。官位は従五位上。*「監」は大宰府の判官(じょう、三等官)。「玉鬘」巻での大夫督(たいふのげん)。

殿も、こなたかなたにかかるものどもの散りつつ(何処の部屋でもこうした物語の写しが遣り掛けになっているのを)、御目に離れねば(御目に付けなさって)、

「あな、むつかし(いや大変だ)。女こそ(女と言うものは)、ものうるさがらず(世間話が好きで)、人に欺かれむと生まれたるものなれ(噂話に左右される生き物のようだ)。ここらのなかに(こうした作り話の中に)、真はいと少なからむを(本当の事はごく僅かだというのに)、かつ知る知る(それを承知の上で)、かかるすずろごとに心を通し(こうした興味本位の話に気を引かれて)、はかられたまひて(すっかり夢中になって)、暑かはしき五月雨の(蒸し暑いこの梅雨時に)、髪のはるるも知らで(髪のはれも忘れて)、書きたまふよ(書き写しなさるのだな)」

とて(と対の姫に話して)、笑ひたまふものから(お笑いになりながら)、また(その反面)、

「かかる世の(こうした世に語り継がれた)古言(ふること、昔話)ならでは(無しには)、げに(確かに)、何をか紛ることなきつれづれを慰めまし(気を紛らわせようもない此処のところの鬱陶しい天気を過ごせないだろう)。さても(それにしても)、この偽りどものなかに(こうした作り話の中に)、げにさもあらむとあはれを見せ(いかにもそうだろういう気にさせ)、つきづきしく続けたる(こまごまと書き綴ったものは)、はた(所詮は)、はかなしごとと知りながら(話の上のことと知りながら)、いたづらに心動き(無性に感動して)、らうたげなる姫君のもの思へる見るに(可哀相な姫君が物思いに沈んでいると思えば)、*かた心つくかし(どこか気になるものです)。*「かたこころ」は<少しの関心>とあるが、「片心」の「片」は<少し>というよりは<片方、一部>で、確かに全体の大きさに比べたら小さいことを示しているかも知れないが、同時に片方(もう一方)では<何かがある>ことを示していて、むしろ語感は<いくらかは残るこだわり、ないし懸念>かと思う。

また、いとあるまじきことかなと見る見る(先ず有り得ない事と思いながらも読み進んで)、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて(凄まじい書き方をしてあるものに驚くが)、静かにまた聞きたびぞ(落ち着いて読み返せば)、憎けれど(その描写はある人物の思い込みに過ぎず、騙された気分になるが)、ふとをかしき節(つい引き込まれている時には)、あらはなるなどもあるべし(その人物の気持ちになって同情してしまうものです)。

このころ(近頃は)、幼き人の女房などに時々読まするを立ち聞けば(幼い姫が女房などに時々読ませる物語を立ち聞きしますが)、ものよく言ふものの世にあるべきかな(実に面白い話を作る者が居るものです)。虚言を(そらごとを、嘘を)よくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど(吐き慣れた者が語り始めた物語だろうと思いますが)、さしもあらじや(そうは思いませんか)」

とのたまへば(と仰ると)、

「げに(確かに)、偽り馴れたる人や(嘘を吐き慣れた人こそが)、さまざまにさも*汲みはべらむ(いろいろ工夫してさも有りそうな話に組み立てるのでしょう)。ただいと真のこととこそ思うたまへられけれ(でも良く出来ていて、本当の話に思えてなりません)」 *「くむ」は「汲む(思い量る)」とされるが、「組む(編集する)」でも良さそうだ。

とて(と対の姫は応えて)、硯をおしやりたまへば(硯を押しやって写本を止めようと為さるので)、

「*こちなくも(不当に)聞こえ落としてけるかな(物語というものを貶してしまったようです)。神代より世にあることを(物語というものは神代からの事柄を)、記しおきけるななり(記録してあるものです)。『*日本紀』などは(などの公式の国史は)、ただ*片側ぞかし(ただ歴史の一面を記録してあるに過ぎません)。これらにこそ(こうした昔話にこそ)道々しく詳しきことはあらめ(それぞれの成り立ちに付いて詳しいことが書かれているものです)」 *「こちなし」は「骨無し」とあり<無作法だ、無礼だ、無骨だ、無風流だ>と大辞泉に説明されている。しかし、「無作法」と「無礼」と「無骨」と「無風流」はそれぞれ概念が違う。似た概念を違う言い方にする場合は本義が絞れるが、この場合は本義が分からない。「こち」は「骨」で良いのだろうか。尤も「骨」は「コツ」であり<本質、急所、勘所、奥義、要領>だと広く取れば、「こちなし」は<不見識一般>を説明できるのかも知れないが、それでは言葉の焦点が掴めない。それともくいや、是は浅はかにも>ぐらいの、ざっくりとした謙遜の定句と見るべきだろうか。 *「日本紀(にほんぎ)」については、注に<『集成』は「『日本書紀』。わが国最初の正史」「ほんの片端にすぎないものです」。『完訳』は「六国史など官製国史の総称」「日本紀などはほんの一面にすぎないものです」と注す。>とある。ここからがいよいよ、作者の弁らしい。 *「かたそば」は<一端、一側面>。

とて、笑ひたまふ。

[第二段 源氏、玉鬘に物語について論じる]

「その人の上とて(ある人の身の上を)、ありのままに言ひ出づることこそなけれ(実名で書き記すことはなくても)、善きも悪しきも、世に経る(よにふる、この世に生きている)人のありさまの、見るにも飽かず(見過ごせず)、聞くにもあまることを(聞き流しも出来ないことを)、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を(後の世にも言い伝えさせたい項目ごとに纏めた話を)、心に籠めがたくて(胸に隠して置けなくて)、言ひおき始めたるなり(書き置き始めたものです)。

善きさまに言ふとては(良い事を知らせたい時には)、善きことの限り選り出でて(良い事ばかりを書き出して)、人に従はむとては(主人の顔色を窺う時には)、また悪しきさまの珍しきことを取り集めたる(敵方の悪い事で目新しそうな事柄を取り集めたりして)、皆かたがたにつけたる(皆それぞれの事情に応じて話を作るのも)、この世の他のことならずかし(他ならず実際の世間の実情です)。

*人の朝廷の才(ひとのみかどのざえ、中国の歴史書とは)、作りやう変はる(作り方が違うところの)、同じ大和の国のことなれば(どちらも同じ日本の過去の事柄ですが)、昔今のに変はるべし(漢字で書かれた昔の日本書紀が中国式なので今の仮名物語りとでは違いが有るでしょう。)、 *「ひとのみかど」は<外国の朝廷>と古語辞典にあり、時の<中国政府>と考えれば「才」は公式の歴史書のようにも

思えるし、広く＜先進文明や異文化＞と考えれば「才」は話の土壌の違いを意味するのかも知れない。また、注には「『集成』は「異朝（中国の朝廷）では、学問（歴史についての考え）も記述の体裁もわが国と違います。この一句、解しがたく、異文も多く、諸説も多い」「（国史と物語とでは）同じ日本の国のことですから、昔からの国史と今出来の物語とでは違いがあるはずですし」。『完訳』は「異朝の物語でさえも一国が違うから書き方は変っているが、また日本の物語でも同じ国のことだから、昔のは今のと違って当然ですし」と注す。＞とあり、いっそう分かり難い。が、わざわざ「朝廷の才」とあることを敬意して、私は「才」を＜歴史書＞と取り、「昔今のに」を＜昔の漢字による日本書紀＞と＜今の平仮名による女語り＞と読んでみたい。そこで「おなじやまのくにの言なれば」を、＜漢字も平仮名も同じ大和の国の言だから＞という意味なのではなくて、＜漢字は中国に習って同じように大和の国の言葉として使うから＞と読む。

深きこと浅きことの*けぢめこそあらめ（漢文と仮名文とでは、大きな歴史書と小さな個別の話という違いこそあっても）、ひたぶるに虚言と言ひ果てむも（女語りを単に作り話と言いつけるのも）、ことの心違ひてなむありける（物の本質を誤るものです）。 *「けぢめ」は注に「『集成』は「意味深い国史と浅はかな物語という差はありましようが」。『完訳』は「その内容に深い浅いの相違はあるでしょうが」と訳す。＞とある。独断で、深浅は大説と小説に読み替える。妙に説明口調の此処の文は、源氏の言葉と思えば違和感があるが、作者の主張と思えば如何にも尤もな言い分、に見える。

仏の（仏教で）、いとうるはしき心にて説きおきたまへる（大変に尊い見識で理論付けなされた）御法も（みのりも、御法經典も）、*方便といふことありて（分かり易く説明する為に物事の一部だけを取り上げて論評することが有って）、悟りなきものは（本質を理解していない者は）、ここかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ（部分部分に異なる説明で全体が矛盾した理解のままになってしまうことがあるものです）。『*方等經』の中に多かれど、言ひもてゆけば（結局は）、ひとつ旨にありて（同じ意味の事で）、菩提と煩惱との隔たりなむ（納得して落ち着くか不満を持って騒ぐかの違いというものが）、この（物語に於いて）、人の善き悪しきばかりのことは変はりける（人の良し悪しを書き分けるものなのです）。 *「ほうべん」は仏教用語で＜仏が衆生を仏の道に導く為に行う便宜上の手段＞と古語辞典にある。このことから、物事を進める為に本質を言わずに部分的な説明で済ませる便法のこと、を言う様になったらしい。物事を進めることが第一義の場合には望まれる知恵であり、物事の理解が第一義の場合には慎むべき誤魔化し、かもしれない。 *「方等經（ほうどうきやう）」は仏典の種類の一つらしい。仏典に付いては分からないので詰め様が無いが、Wikipediaに＜平等思想＞らしい記事があった。平等思想が広く認められていれば、その社会は安定するだろうし、不平等感を不満に思う人が多ければ波乱含みだ。が、何を以って「平等」と考えるのかは、実は相当に難しい。「平等＝満足」ではないが、「不平等＝不満」ではありそうで、施政者にとっては古くて新しい問題であり続ける。と、それは各個人にとっても、いつも問題だ。そう思えば、いくらかは分かったような気になる文だが、仏教を持ち出されては基本的に良く分からない文だ。

*よく言へば（良いように言うなら）、すべて何ごとも空しからずなりぬや（どんな話でも無駄ではないということだ）」 *「よく言へば」は今でも「良く言えば」として、仮名遣いの違い以外は語用も意味も全く同様に使う言葉で、その変わり無さに驚く。敢えてノートするほど意外だ。

と、物語をいとわざとのことにのたまひなしつ（物語を殊更に大した物のように言い成し為さいました）。

「さて、かかる古言の中に、まろがやうに*実法なる痴者の物語はありや(私ほどの愚直な者の話がありますか)。いみじく気遠きものの姫君も(いくら余所余所しい姫君でも)、御心のやうにつれなく(貴方ほど連れなく)、そらおぼめきたるは世にあらじな(空とぼけている人は居ないでしょう)。いざ(さあ)、たぐひなき物語にして(世にも珍しい物語として)、世に伝へさせむ(世間に伝えさせるほどに、熱烈に愛し合おうじゃありませんか)」 *「実法」は「じほふ」と仮名があり、古語辞典には<「じっほふ」の促音「っ」の無表記>と説明がある。ということは、実際には「じっぼう」と発音するらしい。是では殆ど旧仮名遣いの不備というべきものだ。意味は<まじめ、すなお、律儀なこと>とある。「痴者(しれもの)」は<愚か者、阿呆>だから、「実法なる痴者」はざっと<愚直>だ。が、それを言う為の「法」という言葉遣いに、仏法めく響きを感じる。私などは、この言い回しを此処でする為に殿はわざわざ仏教を引いた分かり難い物語論をしたのだ、と勘繰る。どちらにしても、此処の台詞は言い換えが馬鹿らしいほどの言い寄り、というよりは殆ど聞での耳打ちのような口説き、というよりは誘い、というよりは言葉責めだ。

と、さし寄りて聞こえたまへば(殿は不意に姫に顔を近づけて申されたので)、顔を引き入れて(姫は思わず顔を引き背けて)、

「*さらずとも(今此処でしなくても)、かく珍かなることは(こんな珍しい父娘変態は)、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ(世間の噂に立ってしまいますから)」 *「さらずとも」は字面で読めば「類無き物語にして」を受けて<物語などに作らなくても>だが、殿の「いざ」は<さ、やろう>だから、その応えとしては<今しなくても>だ。この場面で「かく珍かなること」と平然と言う姫と殿の関係を、この期に及んで<未通>だと言ひ張るのは、いい加減に興奮めにさえ思えるほどだが、このくらい際どい書き方をして、作者は読者を楽しませようとした、のだろうか。

とのたまへば(と仰ると)、

「*珍かにやおぼえたまふ(珍しいこととお思い為さるか)。げにこそ(それでこそ)、またなき心地すれ(いっそう楽しみだ)」 *殿はすかさず、姫の「かく珍かなること」という言葉に反応する。当然だ。「めづらか」は<目新しそう>でもあり<可愛らしそう>でもあるが、そんなことは現代語の「珍しそう」でも含意されている。何よりも、この素直な殿の反応こそが大事だ。

とて、寄りゐたまへるさま(言い寄りなざる殿の姿態は)、いと*あざれたり(もう自制が利きません)。 *「あざる」は「狂る」とあり<正常の心を失う意>と古語辞典に説明されている。その派生語として<戯れる、寛ぐ、打ち解ける、風流だ>の意味になるとされ、此処でも<大変優雅だった>くらいには言い換えられるのかも知れない。しかし、それでは面白く読めない。折角、作者が好色本にしているのだから、その功を敬意して此処は素直に読むべきだ。全くの濡れ場である。

「思ひあまり昔の跡を訪ぬれど、親に背ける子ぞたぐひなき (和歌 25-07)

「昔話の面白さ、昔の人の懐かしさ (意識 25-07)

*この歌は「昔の跡を訪ぬれど親に背ける子ぞたぐひなき」に付いては、訳文に有る通り<昔話を探してみたが親に背いた子供の例は無い>という筋だろうし、そう詠めたから是の言い回しが出来たかとは思ふ。が、その筋のままでは「思いあまり」を受け止められ無い。「思いあまり」は<気持ちを抑え切れずに>であり、それを受ける意味では「昔

の跡を訪ぬれど」は<貴方に昔の人の面影を求めたので>に成らざるを得ない。すると「親に背ける子ぞたぐひなき」は<貴方も母親と同じように私のものになりなさい>と言っていることになる。それを閨での裸体では無いにしても、殿は姫を抱き寄せながら言っているのである。それも、今となつては夕顔の娘というよりは藤原大臣の娘であり、殿にとっては義兄の娘を抱く倒錯感に浸るといふ色の濃い場面である。相当なイヤラシサだ。

不孝なるは(親の言うことを聞かない親不孝は)、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ(仏の道でも厳しく戒めていますから)」

とのたまへど(と殿は父娘姦通を言葉遊びで悪乗りなさるが)、顔ももたげたまはねば(姫は顔を上げなさらないので)、御髪をかきやりつつ(殿は姫の御髪を掻き撫ぜながら)、いみじく怨みたまへば(強く欲情を訴えなさるので)、からうして(姫はやつとの思いで)、

「古き跡を訪ぬれどげになかりけり、この世にかかる親の心は」(和歌 25-08)

「懐かしい人を訪ねても、こういう人は出て来ない」(意識 25-08)

*これは訳文に有る通り<昔話を調べましたが確かにありませんでした、この世にこんな呆れた親心の人は>という筋だろう。そして、贈歌の「跡を訪ぬれど」と「親に背ける子ぞたぐひなき」の詠み方をそっくり返しているので<母親を想えば同意していません、こういう貴方との関係を>という真つ当な親心を喚起する皮肉いっぱい返歌になっている。「実に」は<同意、賛成>を示す言い方でもある。が、実は姫は数えの2歳とは1歳少して母と死別しているの、実体としての母親の記憶は無い。殿が持ち出したから、そのまま返しただけだ。姫には皮肉を込めた心算がなくても、殿は皮肉に感じるだろう、という設定だ。が、閨での「いや」は刺激の追求にもなるので、この返歌に対する殿の反応は微妙だ。

と聞こえたまふも(と母親を引き合いに出して返歌為さるのが)、*心恥づかしければ(殿には気恥づかしく思えて)、いといたくも乱れたまはず(あまり激しく衣服を乱す遣り方は為さいません)。*かくして(ということなので、この日は)、いかなるべき御ありさまならむ(どのような御次第で事を済まされたものやら)。 *「心恥づかし」は<以下、主語は源氏。>と注にある。確かに姫の主語にも見える紛らわしい文だ。それでも、「聞こえたまふも」の「も」が対象を客体視した条件付けの接続助詞に見えるから、主語が変わるようには思える。そしてそう読めば、殿は姫の返歌を刺激の追求とは取らずに、窘めの皮肉に思ったか、もしくは夕顔の懐かしさに優しい気持ちになり猛る気が少し萎えた、らしいと知れる。だから、「いといたくも乱れたまはず」を<もうそれ以上は手出し為さいません>と読むべきかも知れない。が、「いたくも」は<一切～しない>ではなく<ひどい程度には～しない>という語感だ。だからスナオに読めば、<そんなにひどくは羽目を外しなさらぬ>だろう。変態の含みどころか、抑制気味だけに濃密な風情という情交を強く感じさせる書き方だ。 *「かくして」は注に<語り手の弁。『集成』は「草子地」。『完訳』は「物語の後続に、読者の期待をつなぐ語り手の弁」と注す。>とある。が、「いたくも乱れ給はず」は具体的な性愛描写であり、これ以上は隠語を多用することになって一般読物としての体裁を損なうし、当時は生理医学用語による具体的な描写技法も無いので、「読者の期待をつなぐ」というよりは<省略に逃げた>、という事情に思える。それでも、此処の文章はずいぶん表現を工夫して面白さを追求した語り口なのではないだろうか。此処では敢えて「男」「女」と言い立てて心情描写をする事無く、心象を示す歌も親子の縁を強調したものだが、それが却って殊更に父娘姦淫の艶かしさを表現している、かのような作意を感じる。此処までの際どい語りを許すのは、二人には血縁関係はなく、公式の縁組規範も無い、と

いう実体なのかも知れない。これではもう、読者の心象では二人の肉体関係は規定事実だが、「いかなるべき御ありさまならむ」と口をつぐまれてしまっているのです、建前としての未通を否定は仕切れない、か。

[第三段 源氏、紫の上に物語について述べる]

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて(姫君の御教育のためということにして)、物語は捨てがたく思したり(物語を興味深くお読みになります)。『*くまのの物語』の絵にてあるを(絵物語になっているのを)、 *「くまのの物語」は注に<河内本と別本は「こまののものがたり」あるいは「こまのものがたり」とある。『枕草子』には「こまのの物語」と見える。>とある。が、Web 検索しても Wikipedia に「狛野物語」のページがあるくらいで、そのページを見ても今に伝わる写本や絵巻は無いとのことで、話も絵柄もさっぱり分からない。

「いとよく描きたる絵かな(とても上手な絵だこと)」とて御覧ず(と御覧になります)。小さき女君の(幼ないお妃が)、何心もなく昼寝したまへるところを(無心に昼寝していらっしやるその絵を)、昔のありさま思し出でて(自分の昔の姿を思い出して)、女君は見たまふ(上は眺めなさいます)。

「かかる童どちだに(こうした子供同士でさえ)、いかに*されたりけり(何と奔放に愛し合っていたことか)。 *「さる」は「曝る」だろうか。古語辞典には<世慣れている、あかぬけしている、しゃれている、風流だ>との語用が示されているが、原義は<形が崩れる>で、それが<だらしなく乱れる>意にも<型にとらわれずに本質を掴む>意にもなるのだろう。上は幼な妻の昼寝姿の絵を見ているのだから、特に寝乱れた絵とは思えないし、独り寝だろうから、そも「わらはどち」ではない。その無邪気そうな幼な妻の寝姿の絵を見て、殿は「かかる」と言い、「いかに(何と)」「~たりけり(~していたものか)」と感嘆して見せている。ということは、この「~」は「狛野物語」の内容に基づいて<子供らしからぬ行状があったこと>を言っているらしいが、話自体が分からなければ、「曝る」は幅がありすぎて対象が掴めない。そこで、仕方なく下文の先読みから逆推して内容を探る。下文には「この世馴れたる物語」とある。「世馴る」は気持ちの上での恋愛というよりも、それに基づく人付き合いとしての男女の性戯に通じる、という意味かと思うが、それを含めて<恋愛>という言い方もある。だから、どうやら「くまのの物語」は<年少な者同士にしては濃厚な愛欲物語>か、少なくともその場面のある話、だったのだろう。訳文には「されたり」を<マセた>としてあるが、妥当かも知れない。が、私は「さる」の荒々しい語感を拾いたい。

まろこそ(私などは)、*なほ(逆の)例に(ためしに、典型に)しつべく(したいほどで)、心のどけさは人に似ざりけれ(この大人しさは他の人には無いでしょう) *「なほ」は肯定なら<更に、いっそう>で、否定なら<それでも、しかしなお>と、前例に被せる言い方。此処は文意からして逆接だ。が、その文意は全くの冗句だが。

と聞こえ出でたまへり(と殿は上に話し掛けなさいます)。げに(確かに)、*たぐひ多からぬことどもは(世に例を見ない恋の数々を)、好み集めたまへりけりかし(殿は好んでなさっていらっしやったのですからね)。 *「類多からぬ事ども」は、注に<語り手の批評。『集成』は「草子地」。『完訳』は「語り手の評。「源氏の「なほ例に--」を、類例の少ない好色事の意に解して、皮肉る」と注す。>とある。確かに「けりかし」の突き放し方が、殿が言った「されたりけり」に小気味良く響く。

「*姫君の御前にて(姫君には)、この世馴れたる物語など(この恋愛物語など)、な読み聞かせたまひそ(読み聞かせなさいますな)。*みそか心つきたるものの娘などは(年頃になって、色気づいてしまった娘などは)、をかしとにはあらねど(変なものではないが)、かかること世にはありけりと(こうした男女の交わりが世の中には在るものと)、見馴れたまはむぞ(幼い時から見馴れなざるのは)、ゆゆしきや(よろしくない)」 *明石姫君 8 歳。対の姫君 22 歳、紫の上 28 歳、源氏殿 36 歳。 *「みそか」は「密か」で今の<ひそか>とのこと。「密か心」は<色気づいた心>と古語辞典にある。

とのたまふも(と殿が仰るのも)、*こよなしと(自分への対応とは、ずいぶん違ふと)、対の御方聞きたまはば(対の御方が御聞きになれば)、心置きたまひつべくなむ(気に留め為さることでしよう)。 *「こよなし」は他との比較で良くも悪くも<ずいぶん違ふ>という言い方のようだ。とすれば、「こ」が特定指示ないし強調の接頭語で、形容詞の「余無し(他に無い)」に付くような語感にも思える。

上、

「心浅げなる*人まねどもは(軽はずみな恋愛物語の類は)、見るにも*cataはらいたくこそ(読むに堪えないものですが、)。 *「ひとまね」は<人の真似をすること>だろうが、此处で<真似る>と見てても中身が分からない。「まねぶ」は「学ぶ」であり、見聞きした話を<再現する>ことでもあり、そうすることで出来事を<説明、報告する>ことでもあり、ある方法を<再現する>ことでもあり、そうすることで技術を<習得する>ことでもある。此处での話題は「世慣れ」なので、その事に付いて先人に「学ぶ」内容とは<歌の詠み方から床捌きまで>を含むだろうし、「物語る」こと自体が「まね」である。つまりは、作者自身が「世馴れたる物語」を「人まね」と言い換えたに過ぎない。それらに付いて「心浅げ(思慮が足りない、拙い、気持ちが込もっていない)」ということは、「くまの物語」に照らすと<幼い→拙い→型通り>のようにも思えるが、「ども」はこの話の登場人物同士というよりは、類似の物語を一般化して低く評価している、と話の中身を知らない者としては思いたいし、そう思っただけで良さそうなので、その<上っ面をなぞる恋愛ごっこ>とでも逐語訳で言い換えられそうな此処の言い方を、むしろ簡潔に<軽はずみな恋愛物語>とするほうが「心浅げ」の語感に合いそうだ。などと、随分まどろっこしくノートしているようだが、私としては不用意な逐語訳に注釈を付けない怠慢を批判した心算だ。 *「cataはらいだし」は<傍ら(傍観者、第三者)から見て苦々しい>だが、此处では本を見ているので、本の作者に対しても、その中身に対しても、読者は客観的な立場の第三者(=傍ら)だから<読むに堪えない>だ。

『*宇津保』の藤原君の女こそ(ふちはらぎみのむすめこそ)、いと重りかに*cataはかばかしき人にて(とても慎重で信頼できる人で)、過ちなかめれど(失敗はしなさそうだが)、*すくよかに言ひ出でたることもしわざも(杓子定規に言い立てる言葉も言い方も)、*女しきところなかめるぞ(女らしい情緒が無いことと言ったら)、*一様なめる(一本調子で面白味がありません)」 *「宇津保」は「うつほ物語」。私は未読にして未詳だ。「藤原君」に付いては、注に<『集成』は「ふじはらぎみ」「幼名としては「の」を入れないのが慣例であるから、本来は底本(大島本)のように「の」のない表記が正しいであろう。『完訳』は「藤原の君」と校訂。>とある。何が問題なのかすら、私には分からない注だ。が、分からないだけに、どうでも良いとも判断できない。 *「はかばかし」は<てきぱきしている→実務能力が高い>と言った語感だが、そのことから<はっきりしている、明瞭だ、しっかりしている>という意味になるらしい。此处では「重りか(重々しい、落ち着きがある、慎重だ)」との繋がりを考えれば<慎重で頼りになる>だろうか。 *「すくよか」は「健よか」で<体が丈夫だ、心がしっかりしている>が原義と古語辞典に説明され、その自立性の強さから<几帳面だ、堅苦しい、型通りで事務的な>という意味になるらしい。 *「をんなし」は<女らしい>。 *「一様」は「ひとやう」と読みがあ

るが「いちよう(同様、一通り、通り一遍)」の意味だろうから、感想としては<一本調子でつまらない>とまで言うべき、かと思う。

とのたまへば(と仰ると)、

「うつつの人も(物語の上ばかりか、現実の人でも)、さぞあるべかめる(そういう人は居ます)。人びとしく立てたる趣き*ことにて(世間体の立つ趣旨を金科玉条のようにして)、よきほどにかまへぬや(妥協しようとしませんからねえ)。*よしなからぬ親の(分別のありそうな親が)、心とどめて生ほしたてたる人の(大事に育て上げた子供が)、子めかしきを生けるしるしにて(可愛いだけで生きている意味があるといつて)、後れたること多かるは(出来の悪い者が多いのは)、何わざしてかしづきしぞと(一体どんな風に世話してきたのかと)、親のしわざさへ思ひやらるること(親の顔が見てみたいと思ひ遣られることこそ)、いとほしけれ(困ったものです)。 *「ことに」は「殊に」で<特別な物として>。 *「よしなし」は<教養が無い>。

げに(ただ)、さいへど(それでも)、その人のけはひよと見えたるは(その人らしい良さがあると思えば)、かひあり(親はその子供を育てた甲斐も有り)、おもだたしかし(面目も立つでしょう)。言葉の限りまばゆくほめおきたるに(言葉を尽くして美しいと褒めて来たのに)、し出でたるわざ(仕種や)、言ひ出でたることのなかに(言葉の中に)、げにと見え聞こゆることなき(なるほどと思えたり評判になったりする事が無ければ)、いと見劣りするわざなり(ひどく残念な次第です)。すべて(一切)、善からぬ人に(見所の無い人に)、いかで人ほめさせじ(どうして人を褒めさせることが出来るでしょう)」

など(などと殿は)、ただ「この姫君の、*点つかれたまふまじく(少しの難点も付けなさないように)」と、よろづに思しのたまふ(何かと考え仰います)。 *「点(てん)」は<小さな汚点>。

継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを(継母が意地悪する昔話も多かったので)、このころ(この姫君へ物語をお聞かせすることについて)、「心見えに心づきなし(そういう話は、私の気持ちを見透かそうとするようで不本意だ)」と思せば(とお考えになり)、いみじく選りつつなむ(紫の上は注意深く話を選びながら)、書きととのへさせ(女房に物語を書き写させ)、絵などにも描かせたまひける(絵などにも描かせなさいました)。

[第四段 源氏、子息夕霧を思う]

中将の君を(殿は子息の中将の君を)、*こなたには気遠くもてなしきこえたまへれど(春の町の中でも、自身の居室がある紫の上の管理区には出入りさせなさらなかったが)、姫君の御方には(明石姫のお部屋には)、さしもさし放ちきこえたまはず(そのように遠ざけさせなさらず)ならはしたまふ(親しくさせていらっしやいます)。 *「こなた」は殿の居室なのだろうが、文意は、殿が中将を明石姫には兄妹として馴染ませようとさせるが、紫の上には会わせようとしない、ということらしく、その意を込めて「こなた」は<殿の居室がある上の管理区域>という言い方にした。ただ、それが具体的に何処を指すのかは分からない。それでも、「姫君の御方」は西の対屋ないし正殿母屋の西半分で、夏の町から中廊下を渡った春の町の殿舎への入り口近くのような配置、らしい気はする。

「わが世のほどは(私が生きている内は)、とてもかくても同じことなれど(異腹であろうと兄妹に違いはないが)、なからむ世を思ひやるに(死後を思えば)、なほ見つき(やはり見知って置いて)、思ひしみぬることどもこそ(馴染み合っていることこそ)、取り分きてはおぼゆべけれ(特別な間柄と思えるものだろう)」

とて、南面の御簾の内は(みなみおもてのみすのうちは、姫の御方の外側の廂までの出入りは)許したまへり(お許しになっていらっしゃいました)。台盤所(北へ奥まった台所や)、女房のなかは許したまはず(女房の控え室まではお許しなさいませんでした)。あまたおはせぬ御仲らひにて(大勢と居ない御兄妹でしたので)、いとやむごとなく*かしづききこえたまへり(殿はとても大事に二人の将来の安泰を考えていらっしゃいました)。 *「傳き聞こえ給へり」は、注に<主語について、『集成』は源氏と解し、『完訳』は夕霧と解す。>とある。そう言われると、確かに分からない。が、「かしづく」は管理権を持って育てるような語感なので、私は主語を<殿>にして置く。

おほかたの心もちみなども(中將は普段の態度が)、いとものものしく(とても折り目正しく)、まめやかにものしたまふ君なれば(誠実に事を行う貴君なので)、うしろやすく思し譲れり(殿は安心して姫の相手を任せていらっしゃいました)。まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば(明石姫がまだ幼そうに御人形遊びなどをしている様子が見えると)、かの人の(中將君は、あの幼馴染みの内大臣家の姫と)、もろともに遊びて過ぐしし年月の(一緒に遊んで過ごした祖母の家での年月が)、まづ思ひ出でらるれば(すぐ思い出されるので)、雛の殿の宮仕へ(人形遊びで内裏雛への給仕係の役回りを)、いとよくしたまひて(とてもよく付き合いなさって)、折々にうちしほたれたまひけり(時には恋人を思ってふと寂しくお思いでした)。

*さもありぬべきあたりには(気軽に付き合える給仕女や下女などの手近な女には)、はかなしごともものたまひ触るるはあまたあれど(他愛無い口説き文句も言って体を求めることは多く在ったが)、頼みかくべくもしなさず(将来を誓うようにもしません)。 *「さもありぬべきあたり」は逐語で言い換えれば<そう在って当然な近辺>だが、その「そう」とは<気楽に遊ぶこと>だろうから、そのボカシ言葉のボカシ方に何となく感触はあるものの、世情の違いを思えば<商売女>とか<召し人>と簡単には言い切れ無い。しかし、どうせ具体像は分からないから、せめてボカシを少し薄めたい。「はかなしごと」は<口説き文句>。「触る(ふる)」は<肉体関係を持つ>。「頼み懸く」は<婚約する←信頼関係を誓う>。

さる方になどかは見ざらむと(伴侶に考えられなくも無いかと)、心とまりぬべきをも(気が合う相手が居ても)、強ひてなほざりごとにしなして(敢えてその場限りのことにして)、なほ(やはり)「かの(あの内大臣家筋の)、*緑の袖を見え直してしがな(私の下級身分時代を見下した考えを見返してやりたい)」と思ふ心のみぞ(と思う執念が)、やむごとなき節にはとまりける(とても大きな課題として中將の胸に留まっていたのです)。 *「緑の袖」はかつて夕霧が六位であった時に雲居雁の乳母から「六位宿世」と軽蔑されたことをさす(「少女」第五章五段)。と注にある。当時の無官を乳母に軽んじられたことに若君はひどく憤慨したらしいが、そうまで言われると、源氏殿が何故子息に叩き上げの同期生を作らせたのかを少しノートして置きたくなる。といっても、源氏殿の気持ち分かるわけではないので、ただの一般論だが。即ち、時代が安定化すると、身分の世襲化が進む。しかし、時代の底辺は絶えず動いている。社会の安定は増産の前提だが、増産自体は富の偏在化を生み、社会の不安定要素となる。その不安定要素を、施政者は上手く再生産の原動力に再編し続けなければ、社会は混乱し施政者は地位を失う。勿論、社会の多局面で施政者の政

策を待たずに微調整は図られるので、世の中が上手くいくかどうかは施政者の能力ではなく、時の運に左右される
とは言える。しかし、施政当事者は時の運で滅びることを恐れる。したがって、生きている情報を必要とする。公
式の手順を経た情報は、公式の利害関係者によって脚色され、本来の役に立たない。利害から遠く、勃興経済力の
性質と方向性を社会的視点で客観的に整理して報告できる腹心が政治家には、少なくとも心理上で、理想的には政
策上で、必要だ。それが、叩き上げの下級官僚である。彼らは部下を持つ組織力には乏しく、それ故に権威ある政
治勢力としての存在たり得ないので、専ら己の分析能力を権威筋に提供することによって存在意義を示さなければ
ならない。知識人たる僧侶や御用学者とは切れ味が違う。それらと学生寮の同期として個人的に親しみ、今は左近
の同胞として国家を担う気概に燃えているのが中将の君である。特に藤原家とは違って地方組織基盤を持たない源
家にあっては、学識と権威こそが政治力の拠り所である。一時的には藤原家の幼馴染に後れを取ることになっても、
源氏殿が嫡男を学生寮に入れたことには、一定の合理性があったと言える、かと思う。というわけで、「緑の袖」を
＜藤原殿＞だけでなく＜藤原勢が源家の無官時代を見下した考え方＞としてみた。

あながちになどかかづらひまどはば(執拗に何とか付きまどって訴え続ければ)、倒ふるる方に
許したまひもしつべかめれど(内大臣も根負けして姫との結婚をお許し下さるかもしれないが)、
「つらしと思ひし折々(悔しく思ったあの時に)、いかで人にもことわらせてまつらむ(どうし
ても謝って頂きたいと)」と思ひおきし(と胸に刻んだ恨みが)、忘れがたくて(中将は忘れられな
くて)、正身ばかりには(姫本人には)、おろかならぬあはれを尽くし見せて(変わらぬ愛情を込め
た手紙を送り続けて)、おほかたには焦られ思へらず(他の人の目には平然を装ったので、焦っ
ているようには思えません)。

兄の君達なども(内大臣家の従兄達も)、なまねたしなどのみ思ふこと多かり(中将のこの余所
余所しさを、却って友達甲斐が無いとばかり思うことが多かったのです)。対の姫君の御ありさ
まを(対の姫君から御返事が無いことを)、右中将は(みぎのちゅうじゃうは、藤原家長男の右近
の中将は)、いと深く思ひしみて(ひどく気に懸けて)、*言ひ寄るたよりもいとほかなければ(言
い寄る方法も童女のミルコだけではまるで頼り無いので)、この君をぞかこち寄りけれど(この弟
君に口添えを願ったが)、 *「言ひ寄るたより」は与謝野訳文に従って＜童女のミルコ＞を補語する。

「人の上にては(姉のことなので)、もどかしきわざなりけり(良く事情が分からないのです)」

と、つれなく応へてぞものしたまひける(つれなく応対していらっしやったのです)。昔の父大
臣たちの御仲らひに似たり(昔の父親同士の御関係と似ています)。

[第五段 内大臣、娘たちを思う]

内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに(お子たちが何人かの妻ごとに変多く在ったが)、そ
の生ひ出でたる*おぼえ(その妻たちの身分や)、人柄に従ひつつ(本人の気質などに応じて)、心
にまかせたるやうなる*おぼえ(本人が望むような地位に)、御勢にて(おんいきほひにて、大臣の
御権勢によって)、皆なし立てたまふ(皆お就かせなさいます)。 *「おぼえ」は＜評判、声望、寵愛＞
または＜知覚、記憶、自信＞などと古語辞典にある。また、それが対象本人の「おぼえ」であることも、世間や別人
の「おぼえ」であることもあり、かなり分かり難い語だ。此処では「おぼえ」に「御」の敬語がないので対象本人の＜属

性たる事情>と見るが、此処の対象本人は「御子ども」であり、その生来の事情とは<母方の身分>だろうと訳注に従う。 *同様に、この「おぼえ」は<地位>と見る。

女はあまもおはせぬを(女の子は少なくいらして)、*女御も(入内させた正室腹の一姫である弘徽殿女御も)、かく思ししことのとどこほりたまひ(立后が適いなさらず、内大臣の摂政就任の思惑も外れ)、*姫君も(春宮妃にと考えて離別した妻妾から引き取って祖母の大宮に養育を任せていらした二姫も)、かくこと違ふさまにてもものしたまへば(幼馴染みの源氏中将と恋仲になってしまい、関白就任の思惑もはずれ)、いと口惜しと思す(殿の義兄である藤原大臣は非常に残念にお思いです)。 *「女御」に付いては、注に<弘徽殿女御、「潯標」巻で冷泉帝に逸早く入内して、後の地位を望んでいたが、「少女」巻で、後から入内した源氏の養女梅壺女御に立后されたことをさす>とある。 *「姫君」に付いては、注に<雲居雁を春宮妃にと志していたにもかかわらず、夕霧との恋仲になってしまったことをさす。>とある。大奥の女語りこそが、権力中枢の抗争事情を説明できる王朝時代、ということか。

かの撫子を忘れたまはず(大臣は常夏が儲けていたあの撫子をお忘れなさらず)、*ものの折にも語り出でたまひしことなれば(こうしたお世継ぎ話などの折に触れて家族内にお話しなさっていたことなので)、 *「ものの折」は<何かの折>ではない。撰閲家を窺える藤原左家ならではの<そうした機会>である。この文はそういう文脈の文節だ。

「いかになりにけむ(どうなっていることか)。*ものはかなかりける親の心に引かれて(気弱な母親の失踪に伴って)、らうたげなりし人を(可愛い娘を)、行方知らずなりにたること(行方知れずにしてしまったとは)。 *「ものはかなかりける親の心」に付いては、「帚木」第二章第三段で時の頭中将は「常夏の女の物語」を<親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、事にふれて思へるさまらうたげなりき。>と語っていた。「この人」とは頭中将を指すので、女は藤原殿を頼りにしていた訳だ。藤原殿は女に<気弱>な印象があったのかも知れない。ところで藤原殿の弁では、しかし当時は頻繁にはその女の所に通わず、女も同情を嫌っていたようで、その内に不意に失踪した、と説明されていた。その弁とは、<涙をもらし落としても、いと恥づかしくつつまじげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむは、わりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえ置きはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。>だった。が、私の解釈では、女は同情を嫌ったのではなく、娘を右大臣家に渡したくなかったが、鈍感な藤原殿が実の母子養育を保証せず、むしろ責任を持って当家で藤原姫として育てるから安心するように、とか言ったので、それを悲観して殿から逃げた、という事情だったと思う。いや、藤原殿を鈍感とは言ったが、当時の身分社会なら当然に、今でも富豪家だったら有り得る事だろうが、男が責任を取って名門家の子供として育てる、というのは寧ろ正論で、親に死に別れた身寄りの無い女が我を張る方が変わっている、ようには見える。しかし、女は大納言の家格の出だった。親が早世して没落したとは言え、いや、それだけに我が子だけが高貴な血筋の自分が生きる証であり、実際には地位や富がなくても共に暮らせば、共に誇り高く生きて行ける、生きて行きたい、と思ったのかも知れない。私には、子を持つ母親の気持ちは実感としては持ち得ないが、姫君を紫の上に預けて、自分はひっそりと離れて暮らす明石君を見た時に、その生き方を宿命として親から言い続けられてきた受領の娘だからこそ耐えられるのではないかと同情したい気にはなる。その意味では、常夏はそういう同情を許さない自尊心の高い女だった、のかも知れない。

すべて女子(をなご)といはむものなむ、いかにもいかにも目放つまじかりける(くれぐれも目を離してはいけないものであった)。*さかしらにわが子と言ひて(功を急いで藤原姓を名乗り)、あやしきさまにて(不審者がられて)*はふれやすらむ(放浪して途方に暮れているのではないかと)。

とてもかくても(とにかく)、聞こえ出で来ば(音信があれば、保護したい)」 *「さかしらに」は<利口ぶって>だが、不遇な者が藤原家の声望を知り、その権勢にあやかりたく思って、知らされた血縁を自称する、ということを行っているのだろう。しかし、実際には有力な縁故者に知己がなく大ボラ吹き呼ばわりされて路頭に彷徨う、というのは良くある悲劇だ。だから、「あやしきさま」は<怪しまれる状態→不審者扱いをされる>。 *「はふる」は「放る」で<宛てなく彷徨う、放浪する>。「やすらふ」は<休む、休ませる>でもあるが、<動きが取れない→途方に暮れる>でもある。撰関狙いの打算とは言え、我が子を分身と見る素直な親心とも思える。

と、あはれに思しわたる(可哀相に思えてなりません)。君達にも(きみたちにも、藤原殿は息子たちにも)、

「もし、さやうなる名のりする人あらば、耳とどめよ。心のすさびにまかせて(気の向くままにした)、*さるまじきことも多かりしなかに(遊びの情事も多かったが)、これは(その母親は)、いとしか(本当にとても)、おしなべての際にも思はざりし人の(その他の普通の相手程度とは思っていなかった女だったが)、はかなき*もの倦むじをして(ふと悲観に陥って、失踪したので)、かく少なかりけるもののくさはひ一つを(この貴重な一粒種を)、失ひたることの口惜しきこと(失なったという残念さだ)」 *「さるまじきこと」は<そうあるべきではないこと>。此処の「そう」は<正式のこと→結婚>で、「さるまじき」は<結婚などを考えない>という理屈も立ちそうだが、ほぼ成句として「さるまじきこと」で<遊びの情事>を意味するような語感だ。少し前に源氏中将の素行に付いて「さもありぬべきあたり」という言い方があった。此方は<手頃な相手>といった語感だが、指示代名詞でモノヤコトをボカすのは、隠語や生態用語の具体描写では表せない秘めた意識を込めた言い方で、今でも手法は同じだ。 *「物倦むじ」は「ものうんじ」と古語辞典にあり<世をはかなむこと→悲観すること>とある。この認識の正しさは、私には意外、などという言い方が少しおかしいのは承知の上だが、それでも敢えて、実は驚いた、とまで言ってしまう。藤原殿は何を何処まで知っているというのだろうか。尚、この修辞の「はかなき」は<ちょっとした→ふとした>くらいか。

と、常にのたまひ出づ(よく仰っていました)。中ごろなどはさしもあらず(女御の立后を窺っていた最中はそうでもなく)、うち忘れたまひけるを(すっかりお忘れだったものを)、*人の(源氏殿が)、さまさまにつけて(梅壺の立后や幼い姫君の御養育や最近見つかった年頃の姫君のお世話などで)、女子かしづきたまへるたぐひどもに(娘御を大事に為さっている事柄に)、わが思ほすにしも(自分もと思うものの)*かなはぬが(適わないのが)、いと心憂く(実に不満で)、本意なく思すなりけり(不本意にお思いになっていたのです)。 *「ひと」は藤原殿の対抗意識からして源氏殿。 *「かなはぬ」とあるが、一頃は源氏殿が藤原殿の子沢山を羨ましがっていた。今でも、表向きには源氏殿には息子は中将一人だし、女子にしても実の子は明石姫一人だ。そう見ると、意外に実りの少ない光君の情欲で、それが意外と藤原勢にとって源氏殿の可愛げないし勢力のひ弱さに見えて、高い地位を許されていたのかも知れない。実相を映す物語の説得力のバランスとして。

夢見たまひて(藤原殿は女子の夢を御覧になって)、いとよく合はする者召して(とてもよく的中する夢占い師をお呼び出し為さって)、合はせたまひけるに(夢の意味を解かせなさんと)、

「もし(もしや)、年ごろ御心に知られたまはぬ御子を(何年も殿に消息をお知り頂かないでいるお子様を)、人のものになして(誰かの養女として)、聞こしめし出づることや(お聞きになる印として夢に出たのかも知れません)」

と聞こえたりければ(と占い師が申しますと)、

「女子の人の子になることは(女子が人の養子になることは)、をさをさなしかし(あまりないだろうに)。いかなることにかあらむ(どういうことなのだろう)」

など、このころぞ(最近は)、思し*のたまふべかめる(お考えになって子息たちにお話になっているようです)。 *「のたまふ」は「君達にも」を受けたまま、此処まで続いている話しと読む。それに、この段の話は撰閑家を窺う藤氏長者としての藤原左家ならではの事情であり、丸々お家内でのこと、とも言えそうだし、その心算で言い換えた。

(2011年3月1日、読了)